

都盲協

駅ホーム転落防止へ 研修会で心構え学ぶ

東京都盲人福祉協会（笹川吉彦会長）は6日、駅ホームからの転落防止に向けた研修会を都内で開いた。視覚障害者約70人が参加。大倉元宏・成蹊大名誉教授から転落防止に向けた心構えを学んだほか、JR東日本東京支



転落防止に向けた研修会

社や東京メトロの担当者招き、駅ホームでの安全対策の現状説明を受けた。

大倉教授は、過去に発生した27件の転落事故について、最も多かったのが単独歩行で白杖使用していた19件であることを説明。盲導

犬を利用していた場合や、同行援護者がいた場合も、それぞれ3件ずつ事故が起きていたという。

事故が起こる原因については、いつも利用している駅でも乗降車位置の違い、ホームの混雑状況の違い、運行ダイヤの乱れといった通常と異なる状況になることで危険性が増すことなどを説明した。

転落防止に向けて、

白杖を使う際には地面をしっかりとついて前方を確認することの重要性を訴えたほか、通常と異なる状況だと判断したら、警戒レベルを引き上げ、余裕を持った行動をしてほしいと呼び掛けた。

政府や鉄道事業者に対しては、ホームドアの設置促進、駅係員の声掛け・介助の励行、駅ホーム構造の標準化などについて要望した。

JR東日本東京支社の担当者は、電車に乗車する際に閉まりかけのドアに白杖を挟んでしまう事故事例を紹介し、大げがにつながる危険性を周知した。

（濱本高佑）